



育成について思うこと

細谷 敬三*



学生時代を含めると腐食防食との関わりは36年目になります。現在の私が腐食防食技術を生業にできているのは、大学の先生や会社の先輩のご指導はもちろんですが、腐食防食学会という存在が非常に大きかったと考えています。学会の様々な活動を通して、多くの方々と知り合い、同年代の仲間と切磋琢磨する機会をもらい、「学会に育ててもらった」という強い思いがあります。特に、20歳代で「コロージョン・セミナー」を受講したこと、現在の「パフォーマンス研究会」の前身の「材料のパフォーマンス委員会」創設時期から活動できたこと、さらには40歳代に4年間「コロージョン・セミナー」企画を担当したことが大きく影響しています。その中で、私自身はエンジニアリング会社の立場から、プラントに関わる多くの腐食事例を経験して引出しを増やし、学会活動の中では腐食事例を中心に発信してきましたが、学会活動を通して腐食防食のサイエンスに裏打ちされた原理原則の思考の大切さを植え付けてもらったと思います。当たり前のことかもしれませんが、エンジニアリング会社の腐食防食技術者として、サイエンスに裏打ちされた原理原則の技術判断ができるようになったことが、私の大きな財産となっています。

ここで、自分自身が後輩をどのように育成できているかということを考えると、エンジニアリング会社の腐食防食技術者に対する要求の変化もあり、残念ながら上述のような育成が十分にできなかったというのが本当の所です。昔はエンジニアリング会社でも、石油・化学プラントで起きる腐食損傷事例や新しいプロセスの材料選定のための腐食現象の研究が重要な業務のひとつでした。しかし、現在では新しい腐食事象が経験されることは稀で、腐食防食技術者はプラント設計の中で、高度化する顧客要求を配管や圧力容器の設計技術者に分かるように説明すること、多くの技術データを使い材料選定の技術的根拠を文書化することが求められています。材料選定関連図書は、プラントの保全を行っていくための基本データで、リスクベースインスペクション(RBI)のシステムを構築するための重要な図書のひとつとなります。エンジニアリング会社の腐食防食技術者は、若い時から幅広い知識とそれを基に材料選定のロジックを組み上げる力が求められています。これらの日々忙しい業務の中では、昔のように研究開発に時間をかけて経験を積ませる育成はなかなかできなかったということです。ところが、このような厳しい業務環境の中で、若手技術者は今のままでは先輩達のようになれるのかという自分たちの専門性に危機感を持ち、逆に積極的に研究開発を行うことで専門性を高めようという嬉しい変化が起きています。どこの企業も同じ状況とは思いますが、シニアの専門家は、若手を早く戦力にするための技術伝承、過去に蓄積したデータをきちんと整理して残していく役割が求められています。一方で若手技術者にはじっくりと研究開発するような余裕や機会を与えることも重要なだと気づかされました。

当学会は、学術(アカデミア)と産業界が連携して多くの腐食防食専門家を輩出し、今後も専門性の高い人材を育成する役割を担っていくことが求められていることには変わらないと思います。この視点での学会運営は充実していると言え、企業の当学会への期待は相変わらず大きいです。しかし、一方では腐食防食をモノづくりのひとつの要素技術として扱っているような技術者のニーズに対応していくことにも、これまで以上に充実させる必要があるのではないかと考えます。具体的には、専門家が持っている知識やデータを一般の技術者を対象に使いやすい形にして発信していくこと、腐食防食に関する問題を抱えている一般の技術者が相談しやすい環境を整えていくこと、一般技術者向

*日揮株式会社

けの啓蒙育成が目的の講習会を整えることなどです。これらは、広い意味で腐食防食に関わる人材の知識の底上げに寄与し、それが腐食防食技術の裾野を広げることに繋がっていくのではないのでしょうか。

本年から当学会の副会長を務めさせていただくことになりました。ここで述べたことは、ある限られた側面からの私見で、異なる意見の方々も多いのではないかと思います。産業界の代表として、微力ではありますが会員の皆様の忌憚のない多くのご意見を聞かせていただきながら学会運営に貢献することで、「学会に育ててもらった」私の恩返しをしたいと思います。